

〔報告者〕

○佐藤 佳子（さとう よしこ）

NPO 法人 中信多文化共生ネットワーク

松本市多文化共生プラザ 相談員



<プロフィール>

1971 年生まれ、岡山県倉敷市出身。日本語学校で専任講師として勤務した後、結婚を機に 2003 年に長野県松本市に移住。留学生への指導や日本語教師養成に携わる一方、20 年間にわたって地域日本語教室で日本語を教えている。平成 25～28 年度の 4 年間、文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業コーディネーターとして松本市で事業を実施。

また、NPO 法人中信多文化共生ネットワークでは日本語教育アドバイザーとして県内各地の地域日本語教室で研修を行うほか、松本市多文化共生プラザ相談員として地域の外国人や日本人住民からの相談を受け、市の関係部署や各機関・民間団体と連携して課題解決にあたる。

今春からは訪問介護員としても勤務。地域の介護現場と繋がりながら、在住外国人の介護資格取得や現場での働き方について模索している。

松本市地域づくり市民委員、松本市市民活動推進委員、長野県国際化協会日本語教育事業（文化庁事業）運営委員。

<所属団体紹介>

NPO 法人 中信多文化共生ネットワーク（平成 20 年任意団体設立、22 年 NPO 認可）

【松本市からの受託事業】

- ✿ 松本市子ども日本語教育センター：常勤コーディネーター 2 名。市内の小中学校に日本語支援員を派遣（日本語支援員は市のⅡ種臨時職扱い）
- ✿ 松本市多文化共生プラザ：常勤コーディネーター 1 名（多文化ソーシャルワーカー）他、行政書士や日本語教育の専門家などが相談員として勤務。英語と 4 か国語の多言語相談員が対応、同行支援も行う。

【独自事業】

- ✿ ヤングにほんご教室：外国由来の児童・生徒が、放課後、日本語や教科を学ぶ場
- ✿ 中信にほんごひろば：外国人の多い地域の公民館や団地の集会所で開催している教室
- ✿ みんなの日本語教室：文法や読み書きを基礎から積み上げて学びたい外国人向けの教室
- ✿ 多文化人財センター：外国人住民の能力を、インバウンドや国際理解教育に生かす取り組み

<活動内容>

1. 課題

- ★日本語教室の存在が地域に知られていない。
- ★「教え方」に悩むボランティア、「楽しくない」とやめていく外国人受講者がいる。
- ★市職員に、外国人住民の姿がほとんど見えていない。

2. 課題解決のための方法と手順

① 【現状把握・課題設定】

- ・松本市内に 10 以上の日本語教室⇒外国人にも日本人にもあまり知られていない。
- ・「教え方がわからない」「ボランティアが足りない」「受講者が少ない」
- ・教室を主催・共催している市も、職員はほとんど外国人住民と接したことがない。

② 【ファシリテーション】

＜文化庁事業で「有償コーディネーターのいる」新しい教室をつくる＞

- ・システムコーディネーター（1 名）⇒事業全体をコーディネート、外部と連携
- ・プログラムコーディネーター（2 名）⇒モデル授業と教室運営、ボランティアサポート

③ 【連携】

- ・市内の既存各日本語教室、市の関係課、多文化共生プラザ、NPO、地域関係団体

④ 【リソースの把握・活用】

- ・OJT トレーナーやファシリテーターによる研修で、ビジネスの発想を取り入れる。
- ・松本市出前講座や福祉ひろばで開催されている講座の活用、市民サークルへの参加

⑤ 【方法の開発】

- ・有償のコーディネーターが核となり、責任を持って日本語指導・教室運営をすることで、ボランティアも受講者も安心して楽しく活動ができる。そこで掘り起こした日本人ボランティアと外国人受講者を既存の教室に繋ぎ、教室間の連携を図る。

3. 成果

- ・3 年間で、受講者 134 名・ボランティア 102 名が活動に参加
- ・年に一度、市の主催で「日本語教室代表者連絡会議」が開催されることに。
- ・市内の既存各日本語教室と意見交換しながら「松本版・日本語教育副教材」を作成

4. 今後の課題

より「外へ」。外国人にとって日本語を勉強すると、どんないいこと＝メリットがあるのか。日本語教室に行って日本社会につながるものが QOL（Quality Of Life：生活の質）の向上にどれだけ資するのか。個々のボランティア日本語教室が「教える」「交流する」以上の課題に取り組むことは難しい。コーディネーターとして、生活相談のような支援への対応はもちろん、地域の日本語教室で掘り起こされた外国人人財を把握し、他の事業との連携を通じて適切な仕事や地域ニーズにつなぎ、活躍する姿を地域に示していく。